

人間が穀物の生産から、他の部門への生産へ移動していった。それは、穀物の生産性の向上による穀物の過剰生産が生じたからである。その過剰生産により、他の生産物の生産に移動することのぞめる過剰労働が発生する。このため、穀物生産から新たな生産への人口移動が急速に起きた時期には、特に大きな穀物の過剰生産が存在した。

#### 6. 市場機構の役割

古典派経済学は、市場機構において「セーの法則」が成り立つと考えたり、資源の最適分配が行われると考え、市場機構の、そして自由放任主義の有効性を強調した。本稿では、市場機構を、自由放任主義的交換経済のマクロ動学の中心だと考える。ちなみに、歴史において、多くの人間が農耕生産から他の新たな生産への移動を行ったが、なぜ人間は農耕生産をやめ、新たな生産へと短期間に同じように移動していったのだろうか。また、なぜそれが持続したのだろうか。結局、そこに

同等かの強制力があったからであろう。その強制力とは、穀物の過剰生産による相対価格の低落であり、低い相対価格の持続だったのである。これが市場機構の役割である。

### 〔第3章〕 集計量

近代経済学の歴史的限界はどこにあるのであろうか。それは交換経済のための経済学であるということである。歴史的に見れば、経済は、有史以来、自己生産自己消費という経済と、他人のためのものを生産し交換し自らの効用を満たすという交換経済の二つの経済社会を持っていた。古くは原始共同体の世界においても、人間の必需品である塩の交換が行われていた。しかしながら、その二つの経済体の生活規定の度合は、昔と今とでは違わずである。それをどのような尺度をもってはかるべきであろうか。ここでもルクスが最終的にまとめあげた労働力という集計量に注目してみよう。

マルクスは労働の二重性を説く。

『……このようにその有用性がその生産物の使用価値に、または、その生産物が使用価値であるということに、表わされる労働を、我々は簡単に有用労働と呼ぶ。』 いわゆる具体的有用労働である。

『ある商品がどんなに複雑な労働の生産物であつても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、従つてそれ自身ただ単純労働の一定量を表わしてゐるにすぎないのである。』 いわゆる抽象的人間的労働である。

近代経済学は本質的に交換を前提として生成した。ケインズもまたその一人である。ケインズの集計量を次に見てみよう。

『したがつて、雇用理論を取り扱うに當つて、私はただ二つの基本的な数量単位、すなわち貨幣価値量と雇用量のみを使用することとを提案する。このうちの第一のものは厳密に同質的であつて、第二のものもまた同質的にする

ことが出来る。存在する等級および種類を異  
 にする労働の有給の仕事が多かれ少かれ固  
 定的な相対的報酬を受け取っているかぎり、  
 通常労働の一時間の雇用とその報酬に比例し  
 てウェイトづけることによつて、すなわち、  
 通常の半の二倍の報酬を受ける特殊労働の一  
 時間は二単位として数えることによつて、雇  
 用量は我々の目的にとつて十分満足に定義さ  
 れるからである。マルクスが労働に対し労働  
 時間と、た集計量を用いたのに対し、ケ  
 イ・ズは貨幣表示の労働という集計量を用い  
 たのである。

ここで、次の点が問題となる。

1. 労働の量と質の問題。マルクスもケイ

ズもいかなる労働も等量の労働に等置で  
 せると考えたが、これは事実だろうか。

質は量に還元できるかという問題である。

え、労働の生産手段間移動の問題を考へな

ければなるまいのではないか。資本主義の

矛盾の一つである過剰生産に対し、労働力

の移動は圧倒的に遅いという事実である。

3. マルクスは、社会的必要労働と必要労働の区別を行っていったが、この二つはまったく別ものである。

この3点は後に強調されるだろう。本稿では、まず、資本主義成立のために穀物の過剰生産が必要であったということを示すための集計量を次のとおり考慮して定める。

自己生産自己消費の社会と交換経済の社会との両方に使える集計量として、労働時間による集計だけでなく、限界革命という経済上の大きき変革から効用ということも重視しなければならない。そこで、本稿では、どのような効用物の生産の上に生活しているかで人間を振り分け、その人口を集計量とする。

## 【第4章】 歴史の変化その1 (農耕社会)

1.

狩猟  
漁撈

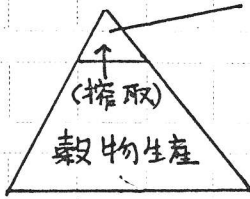
(原始)

る、

穀物  
生産

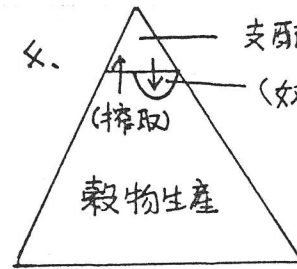
自己生産  
自己消費  
的段階

3.



支配者階級  
(階級の誕生)

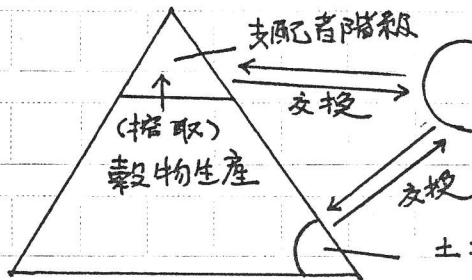
4.



支配者階級  
(奴隷制商品生産の発展)

官営工房、品部、雑戸等

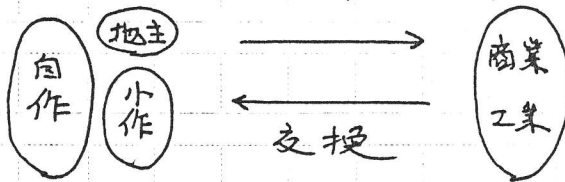
5.



(中世都市の発達)

土地という生産手段を使った穀物以外の  
商品の生産もあずかまがるようになる。

6.



1. 人間の歴史は、狩猟・漁撈生活から始まった。

2. 次第に、より安定した農耕社会へ移り、  
2-1 も、そして、規模の経済が有効な範囲で  
共同体が成立する。

3. その共同体の中で穀物の余剰ができ、  
また地域的に不均等な生産力のことで階級が成  
立していく。

4. そして支配階級が、支配階級自身の消

貴物以外の穀物を、一部の被支配層に与える  
 ことにより、穀物生産以外の生産が行われる  
 ようになる。(奴隷制商品生産の発展) 一方、  
 支配者階級はこの時代の基本的生産手段であ  
 るところの土地を生産に有効な範囲のすみず  
 みまで支配していき、支配を完了していく。

(しかし、このことは土地再分割闘争を妨げ  
 ない。) として権力の世襲が行われ、それによ  
 って序例が決まり支配者階級内部の身分制が  
 確立してくる。(土地を媒介とした支配階級  
 内部の法秩序)

5、さるる穀物の余剰生産の中で、商人  
 ・手工業者・職人等の独立した存在が可能と  
 なり奴隷制商品生産が交換経済の中で払拭さ  
 れていく。そして交換が頻繁に行われるにし  
 たがって、物と物とを直接に交換することに  
 代わり、交換の媒介に貨幣が使用されていく。  
 (中世都市の発達) その需要者はやはり支配  
 階級が中心であるが、少しづつ農民の内部に  
 も交換経済が浸透していく。ここにおいて、

著者 泉 宏明

住所 〒739-0145 広島県東広島市八本松町宗吉 92-5

HomePage

[http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri\\_art/izumi/](http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri_art/izumi/)

copyright©2012 泉宏明 all rights reserved.